

美濃加茂市・早稲田大学 文化交流事業 共催展



せたいにんじょう

世態人情を描く

岡本一平展



《はじめに・西白川》

一九四五(昭和二〇)年三月、岡本一平一家は疎開していた静岡県浜松の空襲が激しくなり、岐阜県加茂郡西白川村(現・加茂郡白川町)の新田亀三宅に転居した。当時、朝日新聞社厚生事業団にいた広瀬為次郎宛の一平の書簡(昭和二〇年二月二〇日付、注1)によると、そこは「量なき物置小屋二階六畳階下六畳に筵を敷き雨曝し廊下に降り込みのみ、のささやかな台所を作り世帯を始め候」であったが、その年二月に「世間も拡まり信用も深まり」半町ほどの近距離の熊沢甲子郎宅へ引越「界限では結構の住びと評し候」(以上前掲書簡)という環境に変わったものの、乳飲み子を含む三人の子とも妻が生きていくにはぎりぎりの暮らしてであった。

息子の太郎は、中国からの復員後まもなく(一九四六年六月)、西白川を訪れた。「乗り継ぎのバスを待っていると、みすばらしく変りはてた父が迎えに来て来た。…親父の風態は、まさにコジキの元締めみたい。…親父の生活も惨憺たるものだったらしい。」(注2)と回想している。そんな状況であったにもかかわらず、一平自身の心境は「窓を開けばすぐ立派なモデルあり、描く時間も許さる、限りの地に在りて右の画風創出に骨折って見度く候。東京の家は焼けたればさしずめ帰りを急ぐ事も無之かるべくと存じ候。」(前掲広瀬書簡)であった。「わたしが折角山中へ疎開の境遇を生かして、ものにしようと思っている画の方の仕事、…わたしはこの山村に疎開して、こんなに朝夕自然に親しんで暮すのは初めてなので、何か山水画の絵に新機軸を出したいと、いささか工夫を凝らしつ、あった。」(注3)と、自然に囲まれ画風向上を考える毎日を楽しんでいた感がある。

疎開地・白川は山峡の地であったが、岐阜・美濃地方に伝わる文芸である「狂俳」が盛んに行われていた。白川では戦後の復興には、農民の笑いこそ必要だとの趣旨で、四六年三月、大規模な狂俳大会が企画された。会には二千三百点もの作品が寄せられ、狂俳同好熱は高まりを見せていた。地元狂俳愛好者の吉田珍斗、三川国民学校校長・丹羽平一、濃飛新聞編集長の一ノ瀬武が一平を訪ね、会の選者を依頼した(注4)。

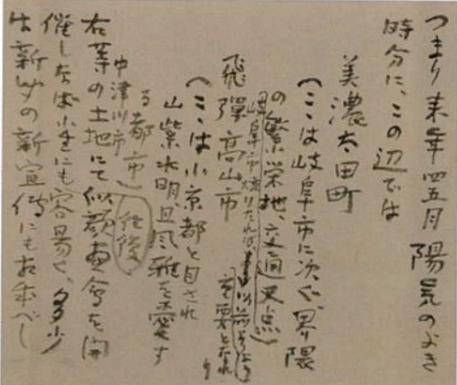
一平は初めて狂俳という「土着の文芸」に出会った。もともと文芸に強い関心を持っていた一平はそれがきっかけとなって、地域で培われた狂俳という文芸をもとに「赤裸々な人間生活の中に取材して、俳句の持つ風雅と川柳のねらう穿ちとユーモアを盛り、生活や感情を表わそう」(注5)と新しい17文字の文芸「漫俳」を提唱する。翌年の新聞コラムに「わたしの漫俳作句控帳を翻してみると、その冒頭に『昭和二十一年三月十七日 時世に鑑みふと雑俳の改革を思い立ちて お粥腹減

太田町は、近世中山道太田宿や木曾川の水運で栄え、近代化と共に高山線、太多線、越美南線などの鉄道が整備され、県内では岐阜市と並ぶ岐阜県南部の中核的な町であった。人口は太田町七〇五一人(古井町八二〇七人、昭和二六年時)であった(注11)。交通の要衝ということもあり、人々の交流や文化活動が活発に行われていたエリアであった。

古井町森山の新聞記者でもあった渡辺和郎は戦後間もなく詩誌「栖」を発行した。渡辺和郎は、一平が疎開していた白川へ新聞記者として取材に訪れて以来親交があり、小説家として一平は強い期待を寄せ高い評価をしている(注12)。森山では、文芸総合誌『若葉文藝』が一九四六年一月に創刊され、広く愛読された(翌二年一月、第十号で廃刊)。中心となったのは、大畑威、長谷川史郎ら森山の若い文学愛好者であった。併せて別冊も発刊された。その巻頭には、「…戦争中の不当の弾圧から逃れたわれわれは大いに書き、又語り得る自由を有しております。われわれは、思ったこと、感じたことをこの別冊によって発表し本誌は極力読者に解放するやう努力致します。…」(長谷川史郎(注13)と述べられ、抑圧からの解放感にともなう自由な表現活動の決意の程が窺える。古井に疎開し「東海芸術学園」を開いた音楽家の桑原哲郎のほか、県内に疎開していた日本画家であり俳人でもある長谷川朝風(注14)や画家の坪内節太郎なども『若葉文藝』に原稿を寄せていたようである。

『若葉文藝』の顧問は長尾和男。長尾は戦前から既に古井町で詩集『隠沼』(昭和五年)などを発行、岐阜県の詩壇の先駆でもあった。一九四六年一月、長尾により同人誌『詩稿』(のち「SATYA」と改題)が発行された(注15)。

また、古井町在住の一ノ瀬武は、濃飛新聞(本社名古屋)記者の傍ら、一九四八



廣瀬為次郎宛の一平書簡(部分)

年二月に文芸誌『濃飛文化』を創刊し編集長をつとめた他、文芸総合誌『濃飛春秋』や『続濃飛春秋』(注16)を発刊するなど地域文芸の発表の場を提供し、かつ自身も文化評論活動を進めていた。濃飛文化を発行する「濃飛文化会」は、千名を超える会員を有し、岐阜県内に六支部、愛知県に一支部を持つ大規模な文化団体で、その拠点、一ノ瀬が在る太田・古井地区であった。前述したように、一ノ瀬は一平が白川疎開中の四六年三月に狂俳大会の選者の依頼をした一人である(注17)。「濃飛文化会」の活動や雑誌の発行、新聞紙上での漫俳の紹介など、

らさぬように笑わそう こうノートされている」と記している(注6)。

四六年八月、三川に漫俳吟社が設立され同好の志が集まった。四七年一月七日、発祥の地の句碑「三つ川の水を盥にうぶ湯かな 一平」が小学校に建てられた。三つ川とは、地名ともなっている、合流する三川(白川、黒川、赤川)という意味と、俳句、川柳、雑俳の三文芸の総合する意味がかけられてあり、新文芸の発祥を祝っている。同時に季刊雑誌『漫風』が創刊された(注7)。一ノ瀬武は濃飛新聞の紙上に早速その新しい文芸を紹介し、一平の「漫俳誰が門はしがき」を三十九回にわたり連載(一九四七年七月〜秋)し多くの人々の注目を浴びるようになった。一平は、各地へ講演会や談話などに招かれ、新しいスタイルの文芸「漫俳」が加茂郡を中心に徐々に浸透していった(別表「岐阜疎開中の一平の制作及び文化交流活動参照」)。

新聞コラム「漫俳誰が門はしがき」(注8)で、一平は「狂俳なるものは：土着の文芸の味だ。従来からの地盤や教養を持つ、この狂俳を、新時代の文化に照し改良したら：。さてその狂俳の仕立直しの役を誰が引き受けるのだ。…結局思いついた自分が始めるより仕方ない。」(一九四七年七月頃)と述べ、文芸改良に対する強い決意を知ることができる。

《転居と地方文化》

自然あふれる西白川に一平は一年四ヶ月ほど過ごしていたが、「やはり食いのこと」「炬がない」(注8)など、家族の暮らしのことを考えて、同じ加茂郡内での古井町下古井(現 美濃加茂市)の岸宅に転居する。四六年一月八日のことである。その時の句「おさかなと燈り慕うて町移り」(注9)が一平の気持ちを表している。

戦後の混乱も漸く収まり、各地に疎開していた人々も徐々に都市へ戻りつつあった。そんな中、なぜ一平は敢えて帰京せず、西白川から二〇キロほど南方の加茂郡古井町(宿場町太田町に隣接)に留まったのであろうか。一平自身「なんだまだ田舎に居るのか、終戦後一年余にもなるのに、どうせ越すなら東京へ戻って来そうなものだ、なぜ二度も移転までして田舎に居るのか。こういう疑問を必ず抱くに違いない。」(注10)と述べている。

転居地太田という町について一平はどのように捉えていたのであろうか。白川に疎開中、一平は戦中から行っていた朝日新聞厚生事業団主催の似顔絵画会を混乱の少ない地方で開催する意欲をもっており、その候補地について、「この辺では美濃太田町(こ、は岐阜市に次ぐ界限の繁栄地、交通又点)岐阜市焼けたれば以前より重要となれり」(前述広瀬書簡(次頁写真参照))として記している。飛騨高山、松本などと美濃太田を同列に扱い、地方での画会が成立し得る都市として認識していたようである。

一平の文芸の普及を一ノ瀬は担い、両者は厚い信頼関係にあった(注18)。当時、太田・古井地区は、集会や出版などを通して文化情報が交流される、都市的要素を持った岐阜の文化先進地であった。一平はそこで文化交流を深めていた。

《疎開知識人》

さて、都市から地方へ疎開していた知識人の敗戦直後期の動向は、そこどのような影響を与えたのであろうか。疎開直後、知識人は「冷たいよそ者扱いを受けた」(注19)りしたこともあったようであるが、戦時期、抑圧されていた地域住民の文化的要求が疎開知識人の関心と噛み合い、戦後各地で新たな文化活動が開かれた。青年団や労働組合、地方文化人などにより、疎開知識人の指導のもと、文芸など機関誌の発行や文化団体の創立などが一気に起こり、まさに堰を切ったかのような情勢であった。しかし、戦後の混乱が収まり都市へ疎開知識人が帰るとともにそれらは下火となり、活動は退潮していった。戦時中疎開した文化・芸術専門家やインテリ(注20)は大きな影響力があったのである。

一方で地方の人々の間では、疎開知識人に対する批判的な眼や啓蒙的態度に対する反発も起こりつつあった。

「終戦直後の空白や混乱からやや立ちなおり、自分の身辺をみまわす余裕ができると、…民衆のまなこには知識人が無用の長物であり、かれらの説く説教が役にもたない観念の連鎖」として地方の人々は捉えるようになった。「かれら(筆者注：疎開知識人)の文化なり教養なりをそのまま民衆のなかに持ち込むという態度」(注21)に嫌悪感を持つ空気もあったようである。岐阜で発行されている『青年ジャーナル』(第二十九号、一九四八年二月)(注22)には、「生活を離れて文化はない。生活をより善い段階へと改善していくところに、すべてが芽生えてくる」と記されており、地方の文化活動はあくまでも生活に根ざしたものであるという認識を窺わせる。

市ノ瀬武は、当時岐阜に疎開していた知識人について次のように論評している(注23)。

「終戦の声と共に疎開者は待ちきれなかったように続々と都会へ帰って行った。それは戦争という大夕立の晴れるのを待ちあぐんでいたようなもので、いわば一時の雨宿りみたいなものであった。」

「時たま東京へ出てみると同業の知人や友人に戦前と違わぬような自由な生活ぶりを見せつけられ「早く帰って来いよ、いつまで土臭いところにいるんだ」と肩の二つもた、かれるともうたまらなくなる。実際田舎の無風状態はこの種の知識人には堪えられない。著名人として引張りだこにされるのも有難迷惑、こっちは持っているものを吸収されるだけで、逆に吸収するものが余りに少い。」

疎開知識人に対する地方文化人としての見方が興味深い。

《第三の外遊》

疎開していた人たちが次々と都市へ帰りつつある中、一平も同様に帰ってしまふのではという周辺の心配(注24)をよそに、一平は悠然と古井に住んでいた。いつも子どもを連れて町を歩き「いっぺいさ」と町の人から慕われていた。「わたしははいわゆる名士のゆえをもつていわゆる偉い人の扱いを受け勝ちである。…これ等をかなぐり捨てたものが、部屋着のまま上っ張りをつけ、買い物袋を提げたわたしである。つまりただのおぢさんとしての自分を自分に見出すことである。」「自分でよく分かっているが、わたしは創作家型の人間で教育家型の人間ではない。」(注25)

一平はそこに住む人々と暮らしを共にし交流を深め、知識人がともすると行いがちであった啓蒙的な態度は微塵も見せなかった。また、提唱した漫俳自体が生活感のあるところに特長があるのと同様、一平自身の文芸活動も、自然体で愉しむ普段の暮らしの中に素材をもとめていた。

「糸遊庵(しゆうあん)と名付けた住まいは木曾川に面し、二階の窓から清流を眺めての漫俳生活を満喫していた。まさに「木曾川と枕を並べ昼寝かな」(注26)である。白川の三川漫風吟社のほか新たに漫風吟社太田支社を結成するなど句会を活発に行い、また、請われれば多治見や名古屋へも出かけて新文芸の講演活動をした。また横井蛙平ら岐阜市周辺の漫画家集団とも交流を持った(注27)。

次の言葉が当時の一平の心境を表している。
「地方と地方生活は珍しくまだ興味が盡きないのだ。わたしは東京で育ち、東京で暮し、二度の外遊も大部分欧州の首都に住んで学んだ。」「私自身の気持は第三の外遊」(注28)

他の知識人たちが田舎に滞在する必要がなくなり帰っていったのに対し、古井転居のががきの句「冬構へまだ地方住みめずらしく」(注29)が表すように、一平は都市にはない田舎の魅力を堪能し、愉しんでいた。まさに「第三の外遊」として、一平は飄々と居心地よく暮らしていた。ただ永遠に帰ることはできなくなってしまうが。

《一平の情熱》

一平が「外遊」と称していた疎開生活は、自身の精神的充電となりえた。しかし一平の意欲と情熱は、単なる個人の趣味の内的方向ではなく、むしろ日本全体の文化発展に視野が向いていた。地方文化の特性を生かしその上で新たな文化活動を開いていくことに関心を注いでいた。

と、庶民目線で新時代文芸を開拓しようとしていた父への賛辞を述べている(注33)。

一平は壮年期、漫画に新たな価値観を与え、改革した。その実現過程が第二の青春であるとすれば、図らずも「第三の外遊」の機会を得て可能となった、地方文化の革新活動(注34)こそがまさに一平の「第三の青春」であった。一平は全情熱を傾け、地方に居続けて自らそれを実践しようとしたのである。

(かにみつお 美濃加茂市民ミュージアム学芸員)

注1 川崎市岡本太郎美術館所蔵(本図録九頁参照)

注2 岡本太郎「父の大いなる遺産」『文藝春秋』一九五八年六月号

注3 岡本一平「漫俳誰が門はしがき」(二)『漫俳のふるさと白川』一九六七年、白川町文化協会

注4 丹羽平一「白川町と岡本一平」吉田珍斗「漫俳回想」前掲『漫俳のふるさと白川』

注5 前掲丹羽平一「白川町と岡本一平」

注6 前掲「漫俳誰が門はしがき」(二十四)

注7 「漫風」創刊号には、一平にとつての漫俳を象徴する句「漫風や池や柳も撫でて吹く」(漫俳誌命名の辞「増補一平全集」第十九巻、大空社、一九九一年、三〇七頁)が載せてある。また「漫俳発祥記念額」には「漫俳は岡本一平先生の提唱にかかわる文藝上の一新機軸であつてその目指すところは新しい時代的感覚をもつて自然並人事の上に美とユーモアを見出しこれを十七字詩形によつてつとめて平易に表現せんとするものである」(前掲「漫俳のふるさと白川」口絵と記されている。

注8 前掲「漫俳誰が門はしがき」(二十五)

注9 岡本一平「漫俳日記」昭和二年一月八日条、前掲「漫俳のふるさと白川」

注10 注9に同じ

注11 「加茂郡白書」一九五三年、加茂地方事務所

注12 渡辺和郎は、岐阜・高富の殿岡辰雄や古井の長谷川史郎が発行していた文学雑誌『蓑座』(昭和二〇年一月創刊)に小説や評論を盛んに投稿していた。創刊号の記事に「岐阜一中、東洋大学出身、中部日本新聞岐阜支局勤務、現在長編小説執筆中」とある。一平は渡辺について「この一つの縣の中で女人に片足かけた若い小説家は渡辺君以外にはないかに見ゆ。」(前掲「漫俳日記」昭和二年二月某日条)と述べている。

注13 「若葉文藝」別冊刊行について(昭和二年一月二五日)

注14 一平は県下に名だたる俳匠、長谷川朝風氏の共感を得たことは以上の光栄である。これのみにて執筆大半の労は酬報された気がする。(前掲「漫俳誰が門はしがき」(二十九))と述べている。

注15 「美濃加茂市史」通史編、一九八〇年、「岐阜県史」通史編現代、一九六七年参照

注16 「濃飛春秋」昭和二十四年八月一日、発行・濃飛新聞社「名古屋市中区」、印刷・太陽堂(加茂郡太田町)、「疎開者は帰る」昭和三年八月一日付付、「青年試験」雑誌「若草」昭和三年一月号より転載所収、「続濃飛春秋」昭和三年八月一日、発行・岐阜文化連盟(岐阜市今小町・岐阜タイムス社内)、印刷・太陽堂(加茂郡太田町)

注17 一平は「いわゆる中央の知名の一人が、県下の山村に疎開しているのを記事にすべく、山中に尋ねて

一ノ瀬の濃飛新聞紙上のコラムで一平は次のように述べている。

「(狂俳は)一口にして盡せばローカルの持味だ。…ただこれをこの儘にしとけば、相変らず田舎の狭い土地で僅かな人々の娯楽の自由を充すだけに過ぎない素材だ。これに時代的文化的素養が加われば、一時期を画するに足るほどの新文学運動ともなり得る。」「地方の文学というものは、もし全く都会のそれにあこがれ、よりかゝる気があればどうしても都会製の二番三番茶を煎じて飲むことに満足しなければならぬ。」「ふだん大体都会文人の三倍の読書と思索をすれば素材を立派な製品にして岐阜提灯や瀬戸のもののように、都会へ輸出することができる。」(注30)

地方文化は無限の可能性のある素材であり、新たな観点を加え見直すことによつて、一つの「ブランド」となり、都会に対して発信できることを主張している。

また、地方文芸誌『若葉文藝』別冊発刊に寄せ、編集長・長谷川史郎宛の手紙で一平は次のように記している(注31)。

「拝復 小家今回縁縁有之、来月初旬太田町に移転致すやう相成候。…来月、太田町へ引移り候後は、極めて御近くに相成候事故、またまた拝参致すべく候。」「地方の文化及び文藝に就ては、これはなかなか興味ある大きな問題にて、地方は従来の如く、都會のそれに、追従憧憬すべきか、はたこの時代を機として獨自の特色を創造すべきか、問題の要點はこゝに係り申候。地方在住の文藝愛好者は誰しも、後者を望まるべし。然らばその具體實踐や如何に」要は、世界の文藝の水準を、都會文壇を通じての二重屈折でなく、直接に採り入れ、いはゆる地方なるもの、價值と認識を新にすべく、これには非常なる勉強を要し候。この價值を新に認識せし、地方なるものを藝術によつて表現せんに、自惚れや獨りよがりできなき、確たる自信を持つべく候。これには充分なる客観批判を要し候。」「右の如き、認識と、自信とを持ち来るとき、もはや、地方は都會對地方の如き狭き意味のものに非ず。地方は、日本の文化代表の特色の一つとも相成るべく、これに文藝的表現力を加へば地方文藝は、日本文學の重心と相成るべし。」「小生も微力ながら、渡辺和郎君等とも談合いたし、自分の勉強かたがた、應分の御手傳ひいたすつもりに御座候。」「昭和二十二年十月五日 岡本一平 長谷川史郎様」

都會ではなく地方にこそ文化に独自性、創造性を發揮できる可能性があり、価値と認識を新たに日本文化を地方から活発化してほしいと鼓舞、激励している。最大限の期待を寄せ、「応分の手伝い」のために地方に残る意思を表している。

一平の息子・太郎は父の一周忌に際し、

「…今までの俳句や、川柳等の枠を打ち破り、より広い可能性・明朗性を獲得している点、漫俳はなんといっても新しい時代のエクスペリションといえる。これは庶民生活の現実の上に極めて親しく足を踏まえている。」「…父の生前の「第三の青春」という言葉も、息子の青春の血に同質的にあふれてくるのである。」(注32)

来られた。(前掲「漫俳誰が門はしがき」(三十一))と記し、選者依頼の前後に一ノ瀬は一平のもとを訪ねていたようである。

注18 一平が亡くなった時、葬儀に関わっている。その前後の状況を「二平を焼く」(前掲「濃飛春秋」)で詳しく記述している。また、道下淳氏からの聞き取り(二〇一二年三月)からも二人の結びつきが強かったことを知った。

注19 「米林富男談」(田辺信二「戦後初期の地域文化運動」『戦後社会教育実践史』第一巻、一九七四年)

注20 田辺信二「戦後社会教育の歩みと地域文化運動」『月刊社会教育』No.83、一九六四年一〇月

注21 「北国文化」五十四号、一九五〇年(北河賢三「戦中・戦後初期における地域文化の研究」二〇〇〇年、基盤研究研究成果報告書 所収)

注22 前掲北川論文所収

注23 一ノ瀬武「疎開者は帰る」(前掲「濃飛春秋」所収)

注24 「…東海藝術學園の桑原哲郎さん夫妻ときたら東京帰心でジリジリしながら唄っているし、岡本一平さんあたりも「漫俳は東京から」と出そうな雲行。」(前掲「一ノ瀬武」疎開者は帰る)と不安を漏らしている。

注25 前掲「漫俳日記」昭和二年一月某日及び「漫俳誰が門はしがき」(三十八)

注26 前掲「漫俳誰が門はしがき」(三十五)

注27 横井蛙平「一平先生の思い出」『岐阜タイムス』昭和三年一〇月一八日。また、豊田積「人間交響楽」

⑤(一九八五年、講談社)から、岐阜市周辺の文化人と交流も窺える。

注28 前掲「漫俳日記」昭和二年一月八日条。なお一平は、一九二二(大正一一)年三月、婦女界社から派遣されて世界一周の旅に出(七月帰国)、一九二九(昭和四)年二月、朝日新聞社特派員としてロンドン軍縮会議取材のため訪欧、一九三二年三月帰国している。

注29 注28に同じ

注30 前掲「漫俳誰が門はしがき」(四)一九四七年夏頃

注31 「岡本一平氏の手紙」『若葉文藝』別冊一、若葉文藝社、一九四六年一〇月二五日

注32 岡本太郎「一平漫俳句集序文」昭和二十四年一〇月一日、一平一周忌、前掲「漫俳のふるさと白川」

注33 一平は自ら「第三の青春」という言葉は用いていないが、このほかにも、「第三の青春」を唱えたり、わたしに「文学青年」という文字を大きく書かせて…(岡本太郎「ヤセ我慢の一生」朝日ジャーナル昭和三年七月二日)、「増補一平全集」第二十巻、一九九一年所収、「むすこの太郎に書かせた

「文学青年」の文字を壁間にはり、自らも「第三の青春」と称してハリきつた生活に没頭し東京入りの

手土産としての「漫俳」新文芸も発展した。(清信重「一平忌」朝日新聞昭和四〇年一〇月二日夕刊)、「増補一平全集」第二十巻、一九九一年所収)と記されるなど、「第三の青春」を謳歌していた様子が窺える。また、道下淳も「第三の青春だ」と初対面の私に言うなど…(道下淳「濃飛文学百話」一九八八年、岐阜ユネスコ協会)と記している。

注34 「将来に重要性を持つであろう地方文化の研究のため」と一平は述べている。前掲「漫俳日記」昭和二年一月八日条。

